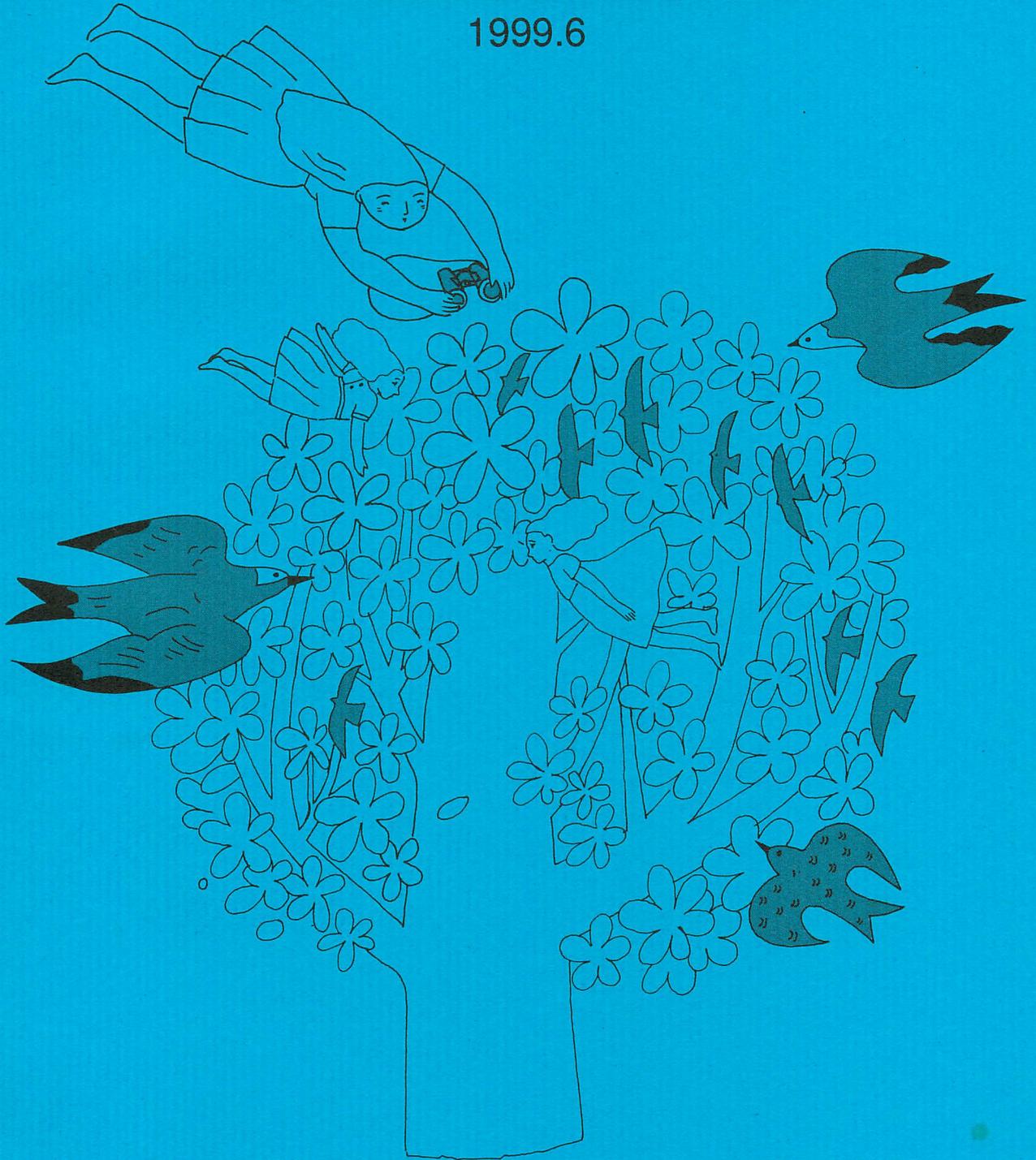


57号

愛鳥教育

1999.6



全国愛鳥教育研究会

愛鳥教育 No.57 1999.6

目 次

多摩川冬期研修会報告 ----- 堤 達俊 3 「冬期研修会 in 多摩川」 に参加して ----- 小野 肇 7 実践報告 小学校におけるデジタルカメラの 効果的な使用 ----- 堤 達俊 8	通学路の植物観察 ----- 箕輪多津男 18 論説 給餌活動と愛鳥教育 ----- 平田寛重 23 平成10年度 収支決算報告 ----- 24 平成10年度 事業報告 ----- 25 書評 『鳥見びと 徒然草』 ----- 箕輪多津男 26 編集後記 ----- 27 愛鳥クイズ ----- 平田寛重 28
バードクラフト ペーパーウェイトの制作 ----- 平田寛重 11 もりまき通信(7) コスタリカ見聞録 ----- 森 真希 14	

多摩川冬季研修会報告

常務理事 堤 達俊

平成11年1月31日（日）、多摩川にて冬季研修会が行われた。私が担当理事であったので、以下、その様子について報告する。

まず、集合場所にて、自己紹介の後、今回の研修の概要について説明を行った。対象は小学校の教師ということで、小学校4年理科「季節と生き物」の中にカモを中心とした野鳥をどう取り入れていくかについて実技研修を通して考えていくのがねらいである。



■生き物観察カード

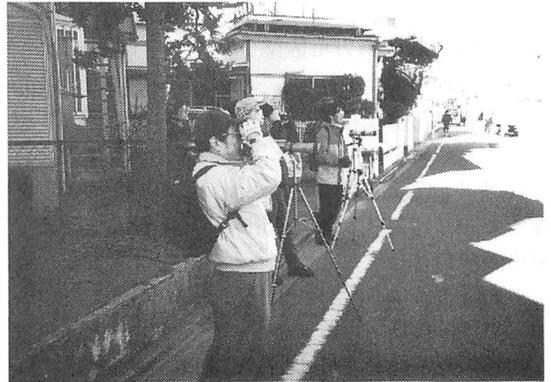
それで、まず、私のクラスで実践した観察カードを模造紙に貼った記録用紙を見ていただいた。これを作成する手順は以下の通りである。



観察カードは、子どもが観察したものをその場で記録したり、学校に戻ってからかいたものである。

それを、川・住宅地・公園・道ばた・畑などの環境別に分けて模造紙に貼っていくのである。児童の手書きのものだけでなく、デジタルカメラで撮影したものをプリントしたものも一部貼ってある。「季節と生き物」では、年4回の単元となるので、1年で模造紙4枚の記録ができることになる。それによって、季節による生物の変化、環境による生物相の違いをとらえられるようにするというものだ。

これを参加者の先生方に体験してもらうべく、カードを配り、集合場所である聖蹟桜ヶ丘駅から多摩川までの区間でカードの記入を行うようにしたが、これといった観察ポイントも少なく、また、カードの記入を十分に行える時間の保証もなかったため、実際にはあまり記録することができなかった。



■カモの観察

多摩川の川縁に着いてからはカモの観察を行った。

1. 野鳥シート「水辺で楽しむバードウォッチング（秋・冬編）」を用いた種の識別

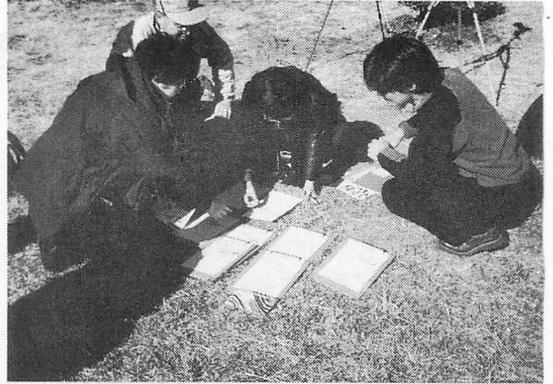
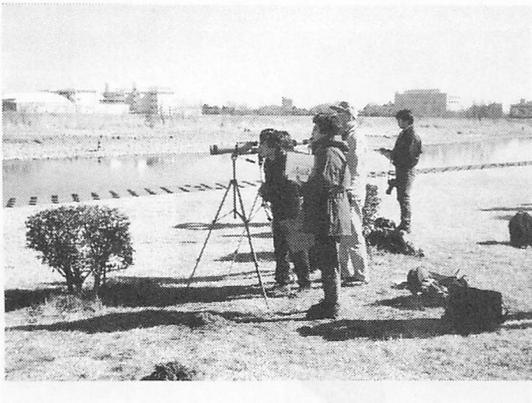
当日、研修ポイントで観察できたカモ類は、カルガモ、コガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ヒドリガモなどである。野鳥シートは、カモの足まで正確にかかれており、陸に上がっているカモの識別も容易に行えた。また、下敷きとしても利用できるので、野外でも使いやすい。さらに、下敷きとして使用すると日常生活の中で頻繁にイラストを見ることになるため、自然とカモの特徴を覚えることもできる。

2. 「実践講座：カモを観察しよう」（平田寛重／愛鳥教育No. 53）を資料にした研修

本会機関誌である「愛鳥教育」を資料として野外研修に使用したのは初めてである。今後も、本誌の利用を積極的に行っていききたいものである。

(1) 「陸ガモ・海ガモ観察シート」を使って

「陸ガモ・海ガモ観察シート」を画用紙に印刷したものに色鉛筆で彩色した。普段からよく野鳥観察を行っている参加者にとっても、スケッチするという作業は、あまり行うことがない。そのため、色を塗るという作業は、普段見慣れている野鳥を改めて見直す機会となった。参加者からも、「なかなか難しい」「ここはこういう色をしていたのか」「いつもいい加減に見ていることがわかった」などの感想が出された。



(2) カモパズルを使って

カモをよく観察するための別の手段として、カモパズルを使用した。カモパズルの作り方は以下の通りである。

① カモの絵をカラーコピーする。

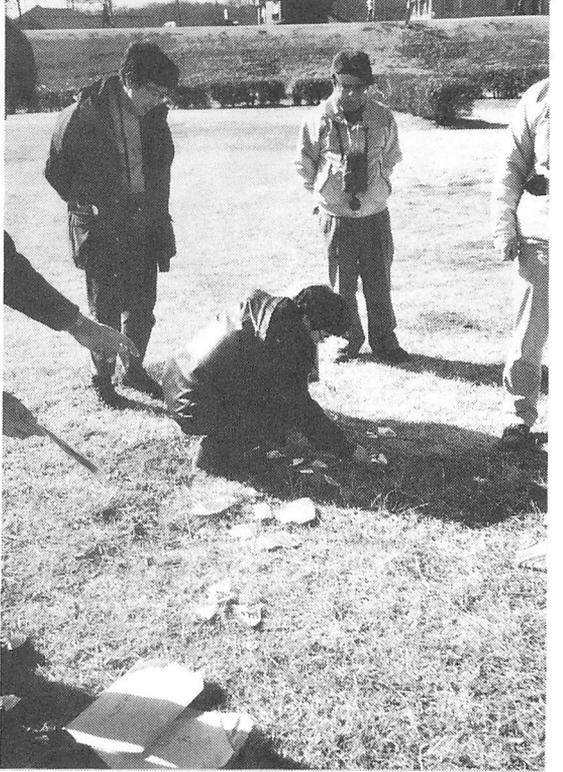
学校現場にカラーコピーがある学校は少ないと思うが、コンビニエンスストア「セブンイレブン」では、1枚50円と比較的安価でカラーコピーができる。しかも、最高拡大倍率が600パーセントまで可能であるので、小さな絵を拡大するのに便利である。その際、拡大率を変化させることにより、パズルの大きさをほぼ同じ大きさにするとよい。パズルにははっきりとした大きさがあると、それによって見分けられてしまうことも考えられるからである。

② カラーコピーしたものを2～4つに切断する。 3つに切断する場合は「頭と首・胴体・尻」に、 4つに切断する場合は、「頭と首・胸・胴体・尻」のようにする。

③ ラミネートする。

何度も使用したり、野外での荒天を考えたりする

とラミネートした方がよい。機械が学校にない所も多いと思われるが、教材制作に大変役立つので、是非購入をお勧めする。



今回は、このようにして作ったカモパズルを、カルガモ・コガモ・オナガガモ・ヒドリガモ・マガモ・ハシビロガモの6種類用意した。それを同じ部位のパーツごとにまとめておく。例えば胴体だったら、6種類の胴体を集めておく。



参加者は、望遠鏡で一つの種のカモの特徴をしっかりと観察した後、パズルをすることになる。いっぺんにすべてを観察することは困難なので、まずは頭部だけを念入りに観察し、頭部だけのパーツを選ぶようにした。2人で協力して行っている人もいた。参加者で感想を述べ合ったところ、「4パーツに分けると、子どもには難しいのではないか」「その子どものレベルに合わせてパーツ数を変えたらよい」「まずは、2パーツから取り組むので十分であろう」という意見が出された。参加者には、おみやげとしてカモパズルを1セット持ち帰ってもらった。

(3) カモのカウント

季節による野鳥の数の変化を調べるために、カウンターを使うという方法がある。

実際の指導の場面でカウンターを子どもが使用することには疑問があるという声も出されたが、今回は、それを使用したことがない参加者も多かったので、使用体験をしてもらった。その結果、初めて使用する人でも、経験者でも計測する範囲を正しく指定すれば記録数に大きな違いはなく、ある程度正確にカモの数を数えられることがわかった。(今回は、60羽ほどの数を数えた。数が大きくなると誤差も大きくなることも考えられる)



以上のような研修を行った後、現地で解散となった。対象者を絞ったため、参加者もそれほど多くはなかったが、小グループならではの和気藹々とした

雰囲気のもと、現場での指導を前提とした活発な意見が出され、よい研修会となった。

「冬期研修会 in 多摩川」に参加して

玉川学園小学部 小野 肇

全国愛鳥教育研究会の研修会に初めて参加させていただきました。1月31日の当日は朝こそ冷え込みましたが、集合場所の聖蹟桜ヶ丘駅に着いた時は少し春めいた暖かさがむかえてくれました。そして、今日のテーマは「カモの観察を中心に」という話を聞いてから多摩川の川原に向かいました。

しばらくカモ達を観察した後、本日の担当幹事の堤先生が、「カモのシルエットが描かれている画用紙」と「色鉛筆」をバッグの中から取り出しました。「ははあ、これは色塗りだな」と思いましたが、これが思った以上に難しかったことが後でわかりました。

「図鑑を見ないように」というアドバイスでしたので、双眼鏡と渡された画用紙とを交互に見ながら色をつけていったのですが、渡された絵は左向きなのに、実際のカモ達といえば、後ろ姿のものや、首を背の方につこんでいるものやらで、次に色を塗りたと思う場所の特徴をなかなか見せてくれないのでした。

わからないところは置いておいて、わかるところから色を塗り、少しずつ完成させていきましたが、でき上がった作品を見て、「こんなカモがいたら、新種発見で大騒ぎになるだろうな」というような出来映えになってしまいました。

これまで、カモを観察している時には、漠然と全体像だけを見て「これはオナガガモ、こちらはヒドリガモ」というように理解していたために、部分部分を細かく観察する習慣が身についていなかったことがよくわかりました。

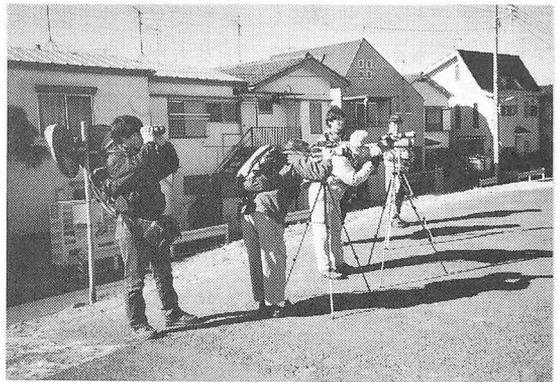
次の課題は、「カモパズル」でした。それぞれのカモ達の「顔の部分」や「尻の部分」など、いくつかのパーツに分かれていて、これを組み合わせて1羽のカモを完成させるというものです。

オナガガモの顔や尻の部分はすぐわかるのですが、「さて、胴体の部分はどれだろう?」と探してみると、これまたけっこう難しいものです。他のカモの似たようなパーツに騙されてしまうのです。

パーツには、2分割のもの、3分割のもの、4分割のものがありましたが、小学校の低学年の子ども達や、高学年でも「カモを見るのは初めて」という子どもには、2分割のもので十分ではないかと思いました。ただ、何回か観察会に参加した子ども達にとっては、2分割のものは簡単すぎるので、3~4分割に挑戦してみるというのが楽しいと思います。

最後に、「カモ行動観察ピング」に挑戦しました。「カモ達がどんな動きをしているかを観察する時のポイントを知るのには、おもしろいゲームだな」と感じました。

15の項目の中に「水はね鳴き」というのがありますが「これはどんな行動なのだろう?」と私にはわかりませんでした。もしかしたら、こういった疑問を持ちながら観察する子どもがいたり、「なんだ、そういうことだったのか」といった新しい発見をする子どももいるのだろうとも思いました。



実践報告

小学校におけるデジタルカメラの 効果的な使用

常務理事 堤 達 俊

最近、情報教育の必要性からパソコンが配置される学校が増えてきた。それに伴い、デジタルカメラ（略称：デジカメ）を購入し、パソコンとつなげて利用することも多くなってきた。

そこで、デジタルカメラを使った実践について考えてみることにする。

1. デジタルカメラの長所

① その場で再生できる

普通の写真の場合、撮影した後、現像に出し、プリントができ上がって初めて自分のとった映像を確認することができる。そのため、授業で野外に出て生物を観察し、撮影しても、その結果を利用するには時間を要するため、子どもの意欲を持続するのに困難が生じる。また、もし撮影に失敗していた場合、子どもが成就感を味わうこともできなくなる。

しかし、デジタルカメラなら、撮ったその場で画像を確認できる機種が多く、撮影結果を見て撮り直すこともできる。そのため、子どもが、自分の撮影結果に対し満足感を持つことができる。また、学校に戻って、すぐにテレビの画面で画像を見ることができる。普通の写真に比べ、大きな画面でクラス全員が見ることができるのも大きな利点である。

② 経済性に優れている

普通の写真の場合、フィルム代、現像代、プリント代と、かなりの経費がかかる。さらに、2～3枚だけ撮りたいのにフィルムが12枚、24枚、36枚といった単位のため、無駄にすることも多い。それに比べ、デジタルカメラの場合、必要なものだけ撮ってプリントすればよいし、プリントする必要がなければなくてもよい。必要なのは電池代だけである。その電池もニッカド電池のような充電式のものを使用すれば、経費はかなり低く抑えられる。

③ パソコンとの相性がよい

パソコンを使用すれば、デジタルカメラの画像を簡単にパソコンに取り入れることができる。観察し

たことを新聞にまとめたり、必要な画像をプリントしたりすることを子ども自身の手で行うことができる。

2. デジタルカメラの短所

① 画質が悪い

画質が悪いといっても、それは普通の写真と比べてということであり、ここ数年の技術の向上により、普通の写真に迫る画質を持ったものも出始めている。小学校における使用を考えた場合、画質はそれほど大きな問題ではない。それは、「こんなものを見たよ」という観察の記録、「こんな花が咲いていたね」という全体での確認に用いることが多いからだ。だから、高画質のものを少数購入するより、スタンダードで、操作が簡単な機種を多く揃えた方が子どもたちの活動を支援する意味からも効果的である。もし画質を重視する場合は、むしろ、あっさりデジタルカメラをあきらめ、普通の写真の方を使用すべきであると思う。ちなみに、私の前任校では、デジタルカメラを10台揃え、グループで1台以上デジタルカメラを使用できる環境にした。

② レンズの交換ができないものが多い

これも、一眼レフカメラと比較すれば、ということである。小学校の現場では、子どもが使うカメラはいわゆる「レンズ付きフィルム」だろう。それに比べれば、マクロやズームを備えたものも多い。ということで、学校現場を考えると短所というより長所に入るかもしれない。なお、マクロや望遠を備えていないデジタルカメラでも、用品メーカーから接写・望遠レンズが販売されていることもあるのでよく調べてみるとよい。

3. 実践例

① 身近な自然の紹介をする

環境委員会の活動の一つとして「季節のたより」の発行を行った。これは、学校内や学校付近の自然

の様子を新聞形式で紹介する活動である。絵と文で紹介するのだが、絵を、デジタルカメラの画像をプリントしたものにしてもよいことにしたところ、多くの子どもがデジタルカメラの使用を選択していた。それは、絵を描くことよりも簡単で、パソコンを使うこと自体が楽しい活動だからのようなのだ。子どもたちは、中休みに取材（撮影）をして、昼休みにパソコンを使ってプリントアウトしていた。パソコンの使用についても、最近では家庭でも使用している子どもが多く、最初に説明しておけば、後は子どもたちだけで操作することができた。

② 観察記録に利用する

理科や生活科などで、子どもたちが、グループごとに地域を観察したり探検したりする機会が増えてきている。子どもたちは学校に帰ってきた後、友だちにその結果を報告するのだが、その時に画像があると見る側の興味関心の持ち方が全く違う。デジタルカメラなら、前述したようにすぐに映像をテレビで見ることができる。ビデオカメラを持つようになるということも可能ではあるが、デジタルカメラの方が軽量で操作が容易である。そのため、低・中学年の子どものためにはその方が扱いやすい。また、ビデオカメラよりも安価なため、万が一の事故を考えてもその方が安心である。

4. デジタルカメラの使用の工夫

① 顕微鏡を利用する。

最近では顕微鏡の接眼レンズ部分から鏡筒に直接小型ビデオカメラを設置できる機械が販売されている。

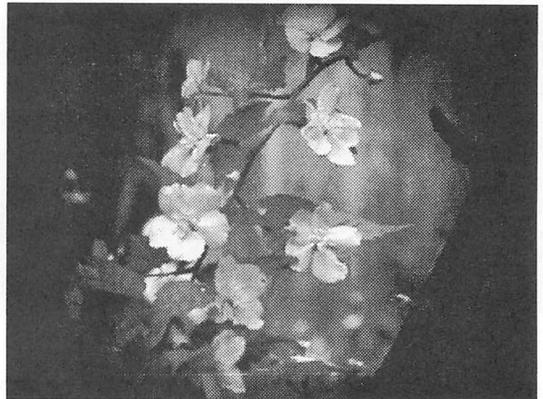
しかし、デジタルカメラのレンズを直接顕微鏡の接眼レンズに押しつけても微生物の撮影をすることができる。ポイントというと、顕微鏡とデジカメの光軸を一直線にすることである。デジタルカメラの画像をパソコンとつないでプリントアウトすれば、学習のまとめとして新聞作りにも使うことができる。

② 望遠鏡を利用する。

野鳥を観察すれば、誰もがその姿を記録にとどめたいと思うだろう。しかし、望遠レンズは高価であり、学校現場で子どもたちが使う機会はそう多くはない。

そこで、顕微鏡で使用したように望遠鏡の接眼レンズに直接デジタルカメラのレンズを押しつけてしまう。三脚のパン棒を動かしながら望遠鏡のピントを合わせ、さらに光軸を合わせるというのは、至難の業である。そのため、どの野鳥にでも使えるというわけではないが、陸に上がってじっとしているカモ類の撮影くらいなら可能である。

顕微鏡にしても望遠鏡にしても、撮影した画像は丸い形で、そのまわりは黒くなっているが、パソコンを使用すれば、必要な部分だけをトリミングすることができる。



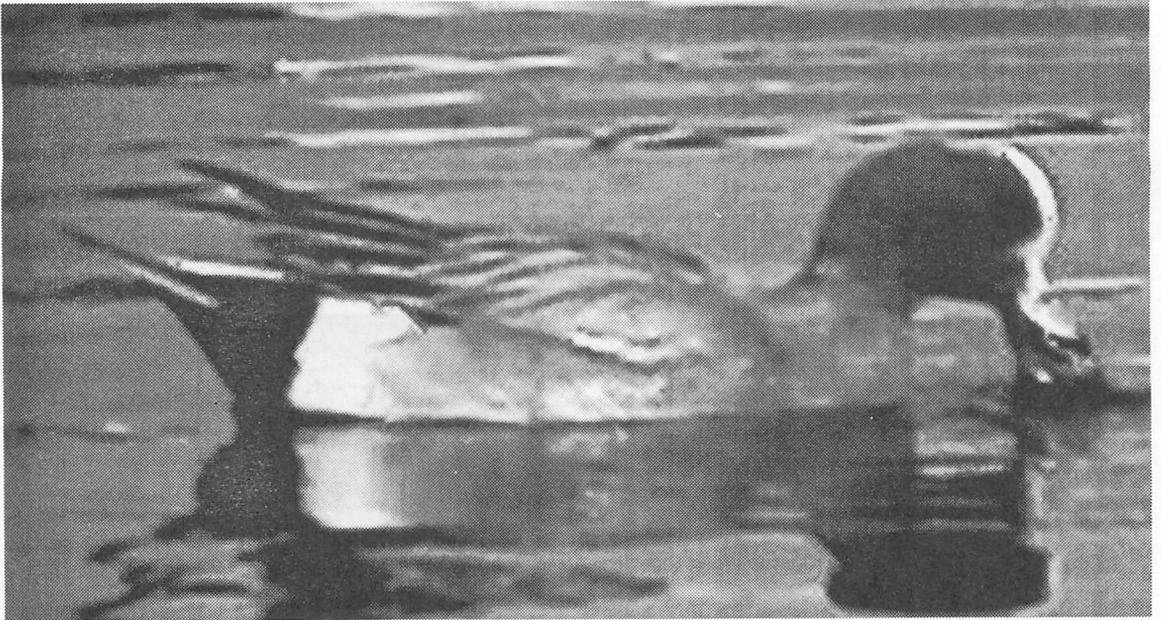
撮影した画像



トリミングした画像

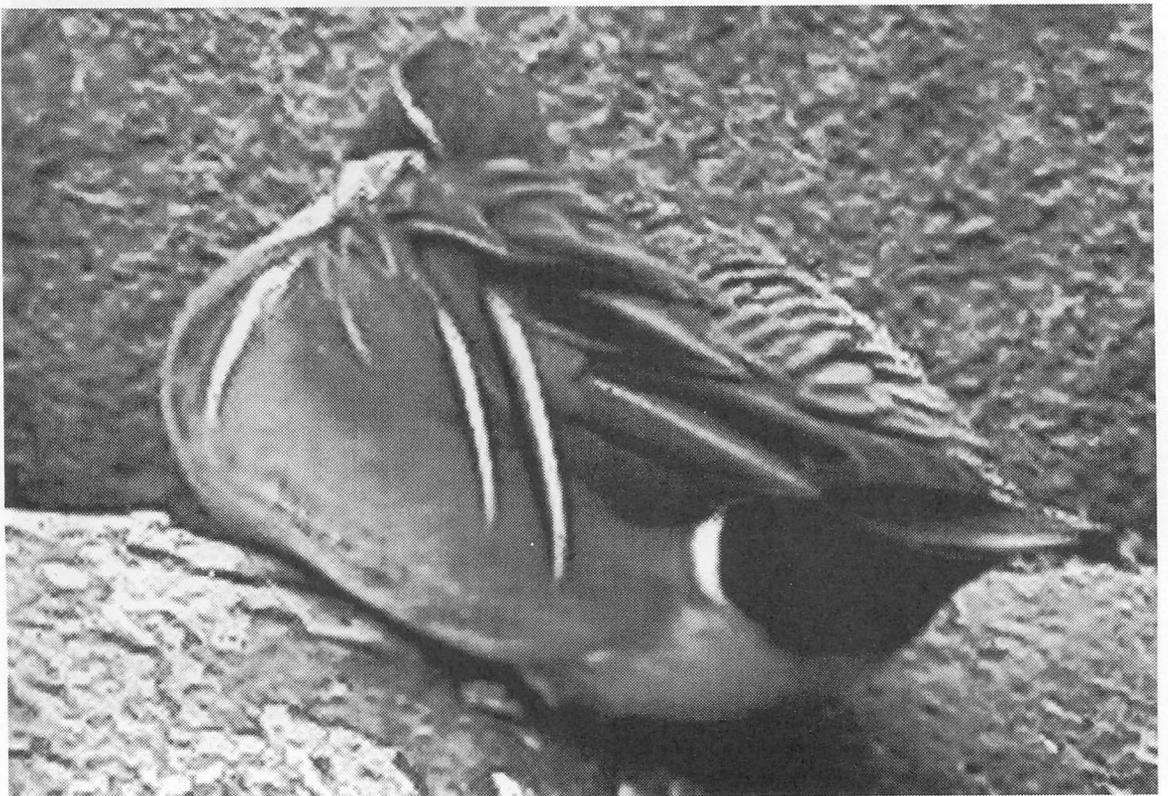
以下は、望遠鏡（初代ニコン・フィールドスコープ）と、デジタルカメラ（リコー・DC-3）の組

み合わせで撮ったヒドリガモとトモエガモである。



ヒドリガモ ↑

↓ トモエガモ



バードクラフト

ペーパーウェイトの制作

常務理事 平田 寛重

鳥をモチーフにしたクラフト作品はいろいろありますが、今回は、割と簡単にできる石を使った鳥のペーパーウェイトを作ってみましょう。

【材料】

河原や海岸で自分の作品作りに見合った石を捨ててきます。適当に拾えばよいのですが、今回は石を組み合わせて作品を作ることにするので、ある程度作品の出来上がりのイメージを思い浮かべながら探す必要があります。この時、石の色や模様も大事な要素になります。色や模様を活かすことで面白い作品が出来上がります。

【道具】

石をくっつける接着剤（今回は、コニシボンドのクイックメンダーを使用しました。2本1組で800円前後でした。）、他に、着色のための絵の具やペンなどです。

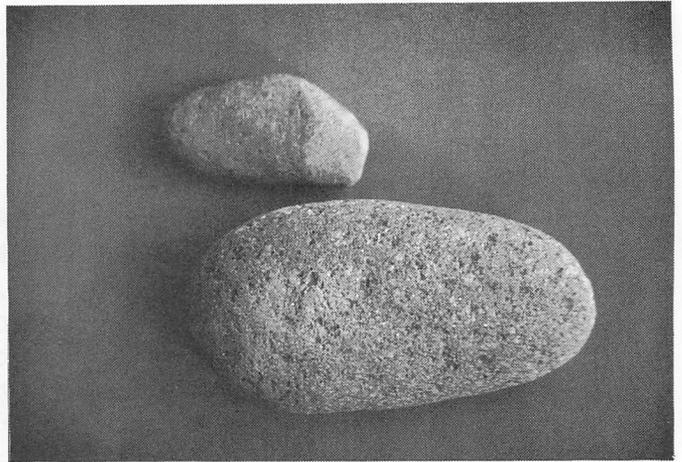
絵の具は、水彩絵の具でも十分ですが、使っているうちに色落ちてしまうことがありますので、クリアラッカーなどでコーティングすることが必要です。リキテックスなどの光沢のあるアクリル絵の具は、値段は張りますが、仕上がりがきれいで、コーティングの必要もありません。

また、ポスカやペイントマーカーなどの光沢のあるペンなどを使うと、手間をかけずに簡単に着色することができます。また、コーティング用のラッカーも必要ありません。



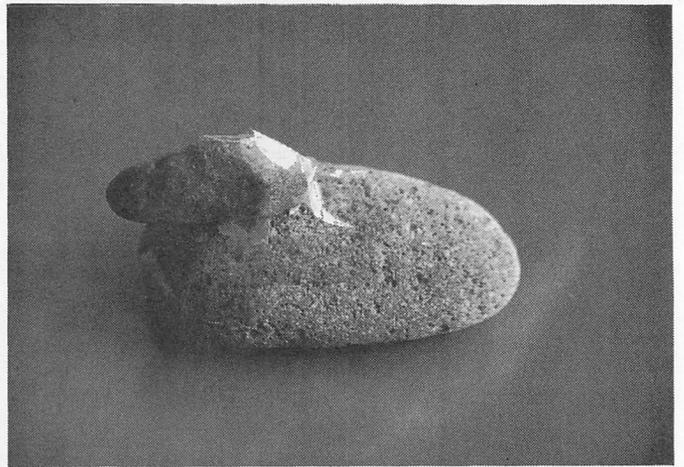
【作り方】

- (1) 石を組み合わせて作品の形を作っていきます。今回のカモは平べったい長丸の石に頭の部分になる石を縦にして組み合わせました。

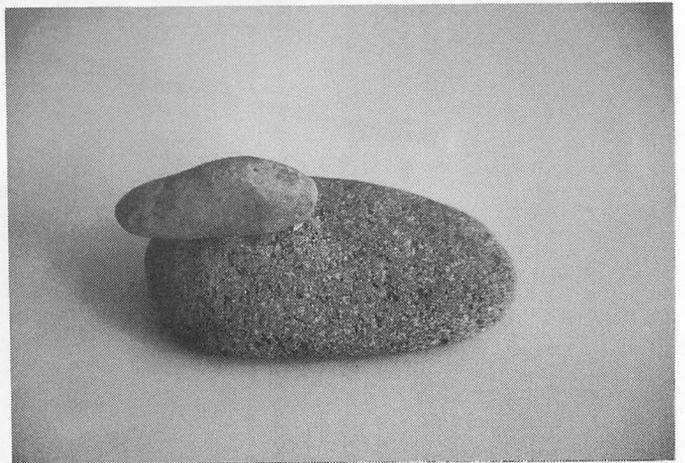


- (2) 接着剤をつけて、テープなどで固定をする。

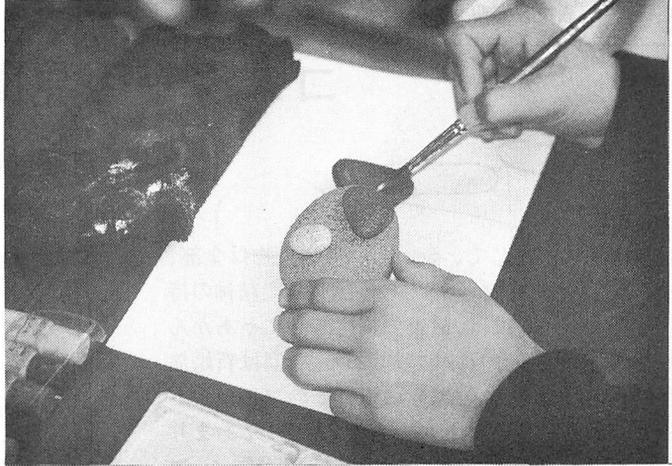
コニシボンドのクイックメンダーは、二液混合タイプです。A（主剤）とb（硬化剤）を同量用意して練り合わせ、それを接着部分につけてテープ等で固定します。この接着剤は5～10分で硬化しますので素早く作業を進めます。



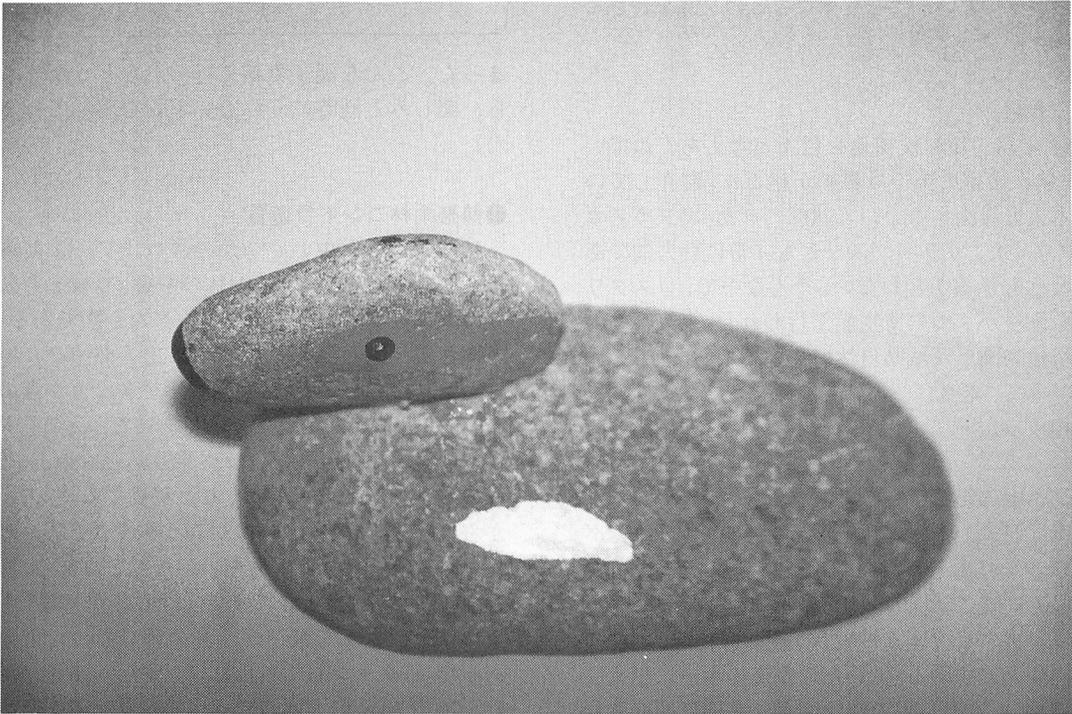
- (3) 石が固定できたら、テープを外します。



(4) 絵の具やペン等で着色していきま
す。(写真は、児童が魚を作っている
時のものです。)



(5) 完成です。



今回は、全部に着色せずに、ポイントとなる所に
だけペイントマーカーで色をつけてみました。出来
上がったカモはアメリカヒドリです。ペーパーウェ
イトとして、職員室の机の上で仕事をしています。

ちょっと細工することでペーパーウェイトとしてお
しゃれに使うことができますので、みなさんもお作
りになってみてはいかがでしょうか。鳥に限らず、魚や
他の動物などに挑戦してみるのも楽しいことで
しょう。

石を材料に使った作品では、石を組み合わせずに
石の上に直接絵を描く場合もあります(愛鳥教育
No.51 遠藤勇氏の作品参照)。石は、重いので

《参考文献》
小学館 森の標本箱、森の標本箱2

もりまき通信(7)

コスタリカ見聞録

自然観察指導員 森 真 希

●はじめに

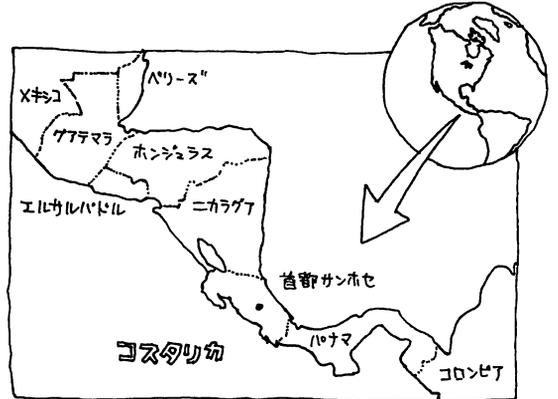
生き物好きが昂じて、会いたい野生生物は全部、行ってみたい国や島も全部という欲張った精神の持ち主となったからには、健康で長生きせにゃあかなあと感じている今日この頃である。今回は新婚旅行という名目の下、久しぶりに海外でのフィールドワークの機会を得ることができた。しかし、あまりにも盛り沢山過ぎて消化不良での帰国となった。コスタリカそのものについての詳細な説明は他の資料にお任せして、ここでは簡単な体験レポートとして私たちが見て聞いて感じてきたことの一部を皆さんにお伝えしようと思う。

●きっかけ

1998年春、旅の候補地を色々と考えめぐっていたが、第一希望の国では暴動が起り、駐在している日本人も帰国するという状態だった。マダガスカル、アフリカ、ガラパゴスなども非常に魅力的であるがどうも予算が合わない。そんな中で、コスタリカの企画展が二つの博物館で行われた。東京都夢の島熱帯植物園と茨城県自然博物館である。両方を見学してみて、素直に行って見たいと感じたので、決定と相成った。

●サンホセの街で

12月4日、日付変更線を越え飛行機で18時間、ダラス空港を経由し首都サンホセに到着。標高1150m、熱帯気候にも拘わらず涼しくてすごしやすい。初日はコスタリカ国立博物館、黄金博物館、動物園と市内観光にまわる。驚いたのが街の歩道に生えていた植物。なんと日本の植物図鑑に普通に紹介されているカタバミ、ハキダメギク、アメリカイヌホオズキ、タカサブロウなどの草が遠くはなれた中米の街にさりげなく生きていた。帰化植物として世界的に広く分布しているらしいが、改めて日本の外での出会いに小さな衝撃を受けた。しかし、見慣れた生き物を確認したのはその時だけ。街で見かけた鳥や虫は全てがはじめての生き物ばかりで視線が定まらず、何から見たらいいのだろうと困ってし



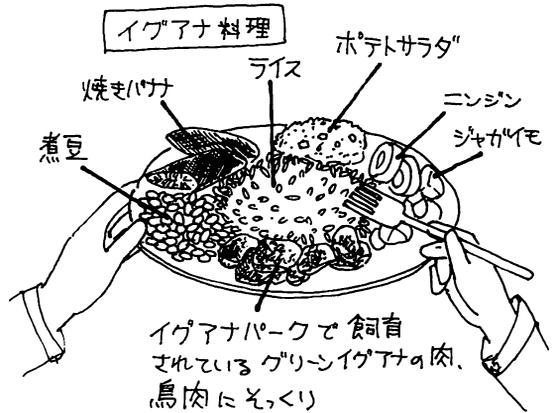
まった。こんな調子で森に行ったらどうなるのやら、楽しみと同時にうれしい不安を感じてしまった。

●熱帯雨林ゴンドラ遊覧

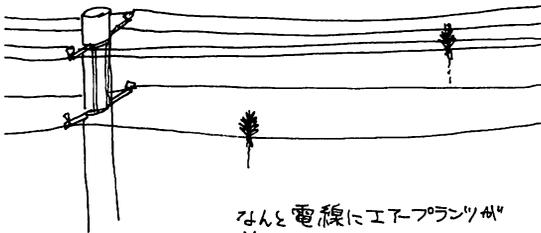
私たちは滞在中いくつかのエコツアーに便乗した。最初のツアーは熱帯雨林の中層、高層を6人乗りのゴンドラで往復するユニークな企画である。ガイドさん、運転手さんを含めて20人弱のグループはホテルからバスで移動。殆どがアメリカからの観光客で、日本人は私たちだけであった。ショートハイクの後、順番にゴンドラへ乗り込む。地上10m程の高さをゆっくりゆっくりと移動する。四方八方から虫だか鳥だか分からない声が賑やかに響いている。他の国でも熱帯雨林を歩いたことはあったが、視線の高さが違うとここまで受ける感覚が違うものなのかと、木々を飛びかう鳥の目になった気分であった。Uターンしてさらにゴンドラの高さが増した。20~30mの大木のでっぺんが見える。突然騒がしくなったかと思うと、ハチドリやムシクイの仲間などの小型・中型の野鳥達が一気に20種類ほど現われた。どれもみな自己主張の強い配色だ。喜ぶ観光客をよそに鳥達は着生植物の密を吸い、木の実をついばみ忙しそうに動き回っていた。動物園やカゴの中に入っている姿しか見られなかったものが、ここではごく自然に生活している。その同じ空間に自分がいることにとっても不思議な気分を味わった。

●サラピキ川クルーズ

ニカラグアとの国境近くに流れるサラピキ川、水辺の生き物観察には贅沢すぎるツアーである。コーヒー色の川で最初に出迎えてくれたのは巨大なグリーンイグアナ、のんびりお休み中の所に私たちが接近。ちょっといやそうに体を少し動かす。20人乗りのボートは観光客を乗せ、とにかく生き物がいたら船を近付かせるサービス精神旺盛のガイドさんが案内する。当の見られる生き物達にとっては少々迷惑かもしれないが、出会える野生生物の種類や数は川のほうが稼ぎやすいかもしれない。ここで会うことのできた森の住人達のことを一つ一つ上げていったらきっと本ができてしまう。それくらい実に様々な植物や鳥、ワニやサル達と時間を共にすることができるツアーである。

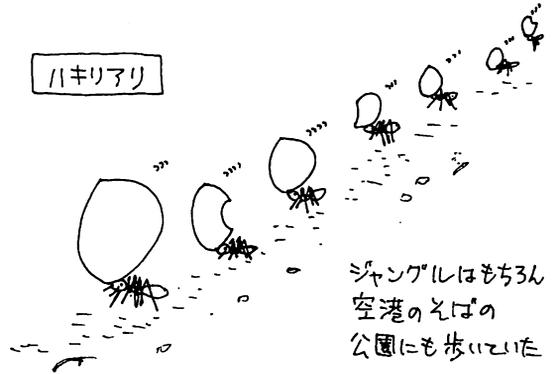


エアープランツ



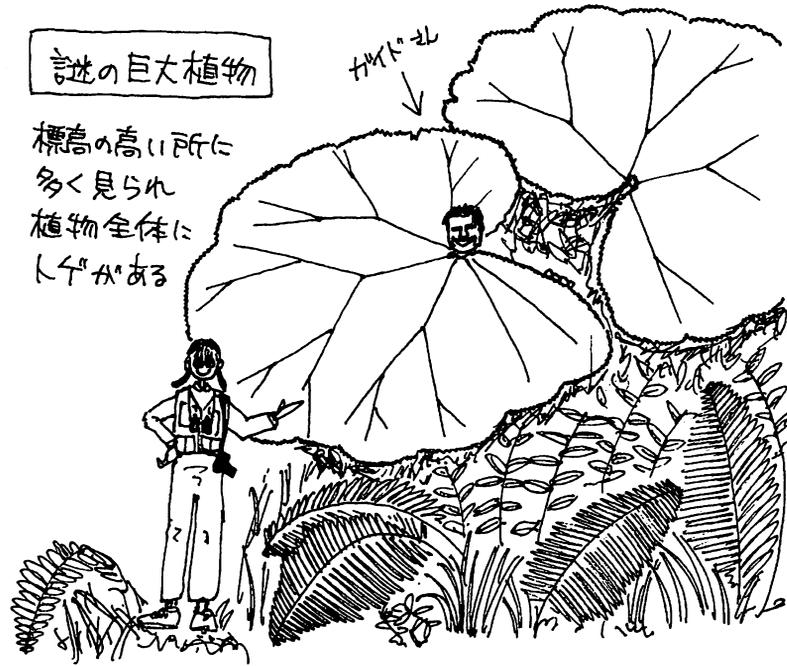
なんと電線にエアープランツが著生していた

ハキリアリ



ジャングルはもちろん 空港のそばの公園にも歩いていた

謎の巨大植物



標高の高い所に多く見られ 植物全体にトゲがある

ケツァール



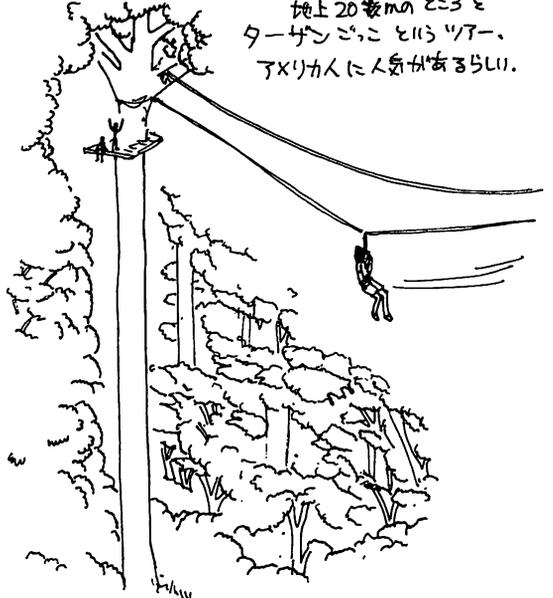
リトルアボガトのある森に生活している。
この木の種子散布に関係している鳥。

アカオノスリ?



ケツァールの森の上で飛んでいた
ノスリの仲間
Red-tailed Hawk

キノビーツァー



地上20数mのところに
ターザンごっこというツァー。
アメリカ人に人気があるらしい。

●ケツァールとの出会い

ホテルを出たのは朝6時40分、サンホセの南東に位置する熱帯雲霧林セロラムエルテ山の麓を目指す。標高2500mの所に個人が管理しているケツァールの森がある。案内をしてくれたガイドさんはNHKの取材班や探検家関野吉晴さんを案内した経験の持ち主。私たちと通訳さんを連れ4人でケツァールの棲む森を歩く。なんと、森に入っても10分で彼らは姿を見せてくれた。ガイドさんはケツァールの好きなリトルアボガドの木があるところに行けば彼等がそこにいることをちゃんと知っているのだ。世界で最も美しいと言われている鳥、和名はカザリキヌバネドリ。枝の茂みから長い緑色の尾がなびき、木の実をくわえ一生懸命飲み込もうとしている。実は直径3cm程の大きさ、本当に飲み込めるのだろうか疑問に思ったが、かなり無理を

している様子で丸飲みした。私たちの気配が気になったのか、彼は青い空をバックにはばたいて他の木に移った。その飛翔する姿といたら息をのむ映像で、これはテレビや写真では感じることはできないなあと思い知らされた気分であった。

●国の財産がそのまま観光資源に

様々な生き物達と出会う度に感じたことは、餌付けでもなく動物園でもなく、野生の状態で出会えることの素晴らしさである。私たち日本人にとって熱帯の生物に接触できる機会といたら動植物園か



セクロヒツアの木

この木を探すと
ミツコピナマケモノに会えると
ガイドさんがおっしゃっていた。×したら、
本当に会うことが出来た。

トリヤドクガエル

トレイルでガイドさんが
見つけたドクガエル
触っても手で目とかを
いじらなければ大丈夫。



ペットショップである。そんな彼等がごくごく当り前にコスタリカの森や川で生活し、その姿を私たちにを見せてくれる。まさに国の自然がそのまま観光客を引き寄せる資源となっているのである。コスタリカは世界で最初にエコツーリズムを打ち出した国でもある。私自身もエコツアーの単語と一緒にコスタリカという国を知った。まさか、そのときは実際に訪れることになるとは思ってもみなかった。このところ雑誌やテレビでコスタリカの生物が頻繁に紹介されているようである。しかし、まだまだ日本人の観光客は少なく年間4000～5000人、この数字はロサンゼルスにおける1日の日本人入国者数とほぼ同じらしい。国の財政のかなりの割合を観光で賄っているこの国は、エコツーリズムを全面に押し出しているが、残念ながらサンホセの街を走る車の殆どから黒い煙が出ており空気の悪さに眉をしかめた。ゴミの分別もあまり行われていないとコスタリカに

住んで5年目の日本人駐在員の方がお話ししてくれた。どこかへでかける機会があったとき、動植物を楽しむだけでなく、騒音振動、水質、大気汚染がどうなっているかという視線も必要かなと反省すべき話題であった。

●体感してはじめて分かること

情報は沢山ある。ガイドブックや写真、映像などから、どんな国でどんな生き物がいるのか、ある程度の子習は可能だ。しかし、それらは所詮切り取られた情報であり、写真や映像からでは、そのシーンの空気の匂いや温度、湿度、聞こえてくる微妙な音は感じる事ができない。自分の中の情報が多いに越したことはないだろうが、何事も体験・経験には変えられないのではないだろうか。「知っている」と「したことがある」とでは大きな差が存在するかもしれない。最近の若い世代では知識詰め込みの教育のためか体験という機会が非常に少ないらしい。体験の少ないままで自然や環境を大切に育つ心は疑わしいものがある。近所でも国外でも生き物センサーを伸ばして体で感じる時間を多くしていければと思う。

●親切丁寧コスタリカ観光省

コスタリカに興味を持った方、あるいは近い未来に行ってみたいと考えている方は、是非一度「コスタリカ観光省観光局」を訪ねてみてください。色々な旅の仕方に応じて、対応をしてくれます。私たちは格安エコツアーを教えていただきました。気になるお値段ですが、成田～サンホセ間往復料金、エコツアー4つ、ホテル宿泊費朝食込、通訳2日間、ガラス空港宿泊などの諸費用が10日間で1人16万7000円くらいです（お土産代などは含みません）。生き物を少しでも好きな方が訪れると帰れなくなるような国です。今年はラムサール条約会議がコスタリカで開催されるとのこと。海外旅行を考えている方、是非コスタリカの面白さを見て聞いて感じてみてください。

コスタリカ共和国観光省観光局

〒151-0051

東京都渋谷区千駄ヶ谷3-54-4

MT原宿ビルB1F

TEL. 03-3478-7981

FAX. 03-3796-2038

通学路の植物観察

事務局 箕輪 多津男

私の家の近所には小学校があり、平日は毎朝、そこへ通う子供たちとすれ違います。毎朝、同じ道を通りながら、彼らはいったい何をみつめているのでしょうか。そんなことを気にしながら、アスファルトとコンクリートで固められた“通学路”を私も歩きます。自然環境といった観点から見れば、ことに住宅の並んでいる地区は、モミジバスズカケノキやイチョウの並木が申し訳程度にあるものの、お世辞にもいい環境であるとは言い難いのですが、それでもよく見てみると、さまざまな野草がそこここに、しっかりと根を張っている様子がわかります。

そこで、春の一日にその通学路をたどりながら目についた野草について、わずかながら綴ってみたいと思います。特に今回は、空き地や野原のような植物の生息条件の比較的良好なエリアよりも、道端の

アスファルトやコンクリートの隙間、住宅の塀沿いのみぞ、あるいは歩道の脇にわずかにのぞいた土の部分といった、極めて条件の悪いところを中心に歩いていくことにします。

まず、初めに目に飛び込んできたのが、スミレ（スミレ科）です。灰色のアスファルト上であって、その可憐な紫色の花は一際鮮やかです。



紫色の花を咲かせたスミレ（スミレ科）

すぐ近くにカタバミ（カタバミ科）の小さな黄色い花も咲いていました。赤紫色の葉をしたタイプのもので、全体でも直径3 cmほどしかないような実に些細な株です。それでも生命感に溢れています。



カタバミ（カタバミ科）の小さく黄色い花

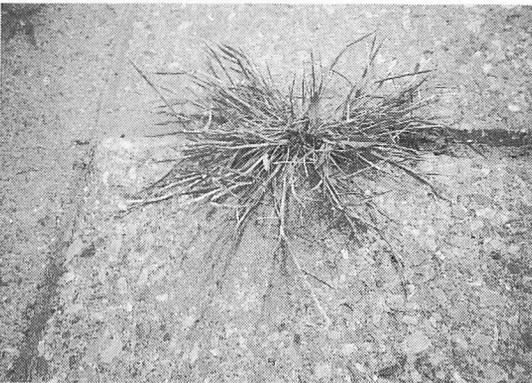


通学路の様子

少し行くと、イネ科の植物がそここで目に付いてきました。スズメノカタビラ (イネ科) やスズメノテッポウ (イネ科)、イヌムギ (イネ科)、オヒシバ (イネ科) など、どれも葉のつき方が似かよっていて、在来種と外来種の枠を越え、同じ仲間であることがうがえます。



スズメノカタビラ (イネ科)



スズメノテッポウ (イネ科)



セイヨウタンポポ (キク科)

次に街路樹の根元にタンポポを見付けました。普段街を歩いていて、目にするものはほとんどセイヨウタンポポ (キク科) なので、それも同じであろうと花の裏側を覗いてみると、これが何と総苞外片 (総苞片の外側の部分) が反り返っていないカントウタンポポ (キク科) でした。この一帯では、おそらくここにある一株のみと思われるので、残念ながらこれも2~3年で姿を消してしまうかもしれませんが。ご存じの通り、ヨーロッパ原産の外来種であるセイヨウタンポポが3倍体で単為生殖をする (受粉しなくとも種子を作る) のに対し、在来種であるカントウタンポポは2倍体で、他家受粉、つまり他の株の花から花粉をもらわないと種子を作ることができません。従って、一株だけ残されたものが生き長らえていくことは絶望的と言わざるを得ません。しかしながら、セイヨウタンポポにほとんど席捲されてしまった状況の中で、どこから種子が飛んできたのか、こんな所でカントウタンポポに出会えたことに、驚きとともに限りない慈しみを覚えました。



カントウタンポポ (キク科)

すぐ傍には、春の七草にも数えられ、ペンペン草の別名で知られるナズナ(アブラナ科)が元気な姿で伸びていました。

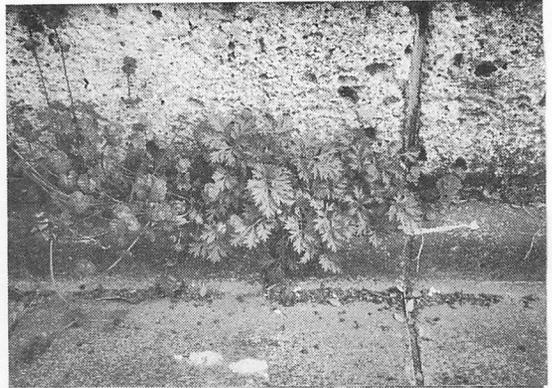


ナズナ (アブラナ科)

その後しばらくの間、通学路に沿って歩いてみましたが、数として目立ったものとしては、白やピンク色の花を咲かせるハルジオン(キク科)、同じキク科で北アメリカ原産のヒメムカシヨモギ(キク科)と、生育初期にこれと非常によく似た姿となる南アメリカ原産のオオアレチノギク(キク科)、草



ヒメムカシヨモギ (キク科)



ヨモギ (キク科) と ホトケノザ (シソ科)

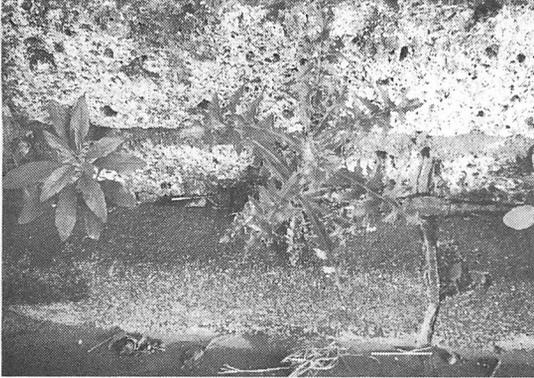


大きな葉のドクダミ (ドクダミ科)



オランダミミナグサ (ナデシコ科)

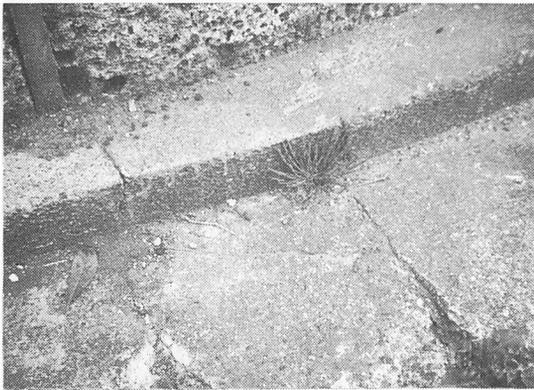
もちの材料や薬草にもなるヨモギ(キク科)、葉の形から名付けられたホトケノザ(シソ科)、さらには、その独特の臭気と旺盛な繁殖力を持つ反面、十葉の別名で薬草としても有名なドクダミ(ドクダミ科)、ヨーロッパ原産で今や道端などでも普通に見られるようになったオランダミミナグサ(ナデシコ科)など、それなりにバラエティに富んだ植物の生育ぶりがうかがえました。



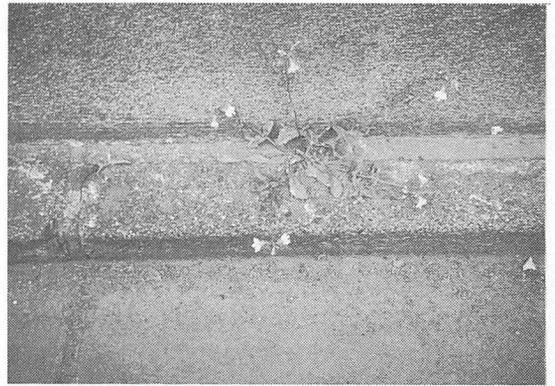
触れると痛いオキノゲシ (キク科)



白い粉が見えるシロザ (アカザ科)



スギナ (トクサ科) の栄養茎



拉がれたトキワハゼ (ゴマノハグサ科)



シロツメクサ (マメ科)

一方、数は少なかったものの、その姿などから印象に残ったものとしては、葉の鋸歯が見るからにトゲトゲしいオキノゲシ (キク科)、胞子茎がツクシの名で親しまれているスギナ (トクサ科)、ヨーロッパでは牧草として使われ、クローバーの別名で知られるシロツメクサ (マメ科)、さらに、光沢のある葉と赤紫色の茎が目立つスベリヒユ(スベリヒユ科)、先端の葉に白い粉が吹き、アカザ (アカザ

科) に非常に近い仲間のシロザ (アカザ科)、一見コスモスのような細い葉を持ちながらヒメジョオン (キク科) をさらに鮮やかにしたような花を付けるカミツレモドキ (キク科) などがあり、それぞれが大変個性的で、見る度に大きなインパクトを与えてくれました。また、トキワハゼ (ゴマノハグサ科) やヒメスミレ (スミレ科) などかぼつんと一株、人に踏まれたのか、拉がれながらもその小さな紫色の花を何とか咲かせている姿にも、しばし心を奪われました。

通学路もそろそろ終わりに近付こうかというところで、一群のオオイヌノフグリ (ゴマノハグサ科) に出会いました。犬のフグリ (陰囊、平たく言えば睾丸の意) などと、誠にけったいな名前を付けられたものですが、青紫色をしたその小さな花の群れは、可憐で美しいものです。しかも、このオオイヌノフグリは、春まだ浅い頃から他の草花に先駆けるようにして花を咲かせ始め、他家受粉と自家受粉の二段構えで生殖を行うという、ある意味で生命のた

くましさを教えてくれる植物であると言えるのではないのでしょうか。



オオイヌノフグリ (ゴマノハグサ科) の群生

その近くにもう一群の植物を発見しました。イモカタバミ (カタバミ科) です。初めのほうで名前を挙げたカタバミと同じ仲間ですが、こちらは南アメリカ原産で当初観賞用として移入されたものが、次第に野草化してしまったものです。また、カタバミが種子で繁殖するのに対し、こちらはその名の通りイモ (芋) のような形をした塊茎を持ち、それによって増殖するという性質を持っています。花も濃いピンク色をしており、葉も大きく、カタバミとは対照的です。このように近い仲間同士を互いに比較してみるのも、大変面白いものです。



イモカタバミ (カタバミ科) の可憐な花

そして、今回の通学路の観察の終着点とした小さな空き地にたどり着きました。ここは、今まで見てきたどの場所よりも植物の生育条件が良いので、緑が束になって目に飛び込んでくるという印象を受けます。そんな中でやはり春の七草の一つで、オギョウ (またはゴギョウ) の別名を持つハハコグサ (キ

ク科) の黄色い頭状花と、コヒルガオ (ヒルガオ科) の少し大柄な薄いピンク色の花が、コントラストをなすように際立って見えました。少し大げさかもしれませんが、最後を飾るにふさわしい色の競演と言ったところでしょうか。



コヒルガオ (ヒルガオ科) の花一輪

学校に通う子供たちにとって、毎日のように歩いている通学路ほど身近な環境はないかもしれませんが。しかしながら、道端に生えている草花に目を止めることが、いったいどのくらいあるのでしょうか。小学校に通う6年間の間に、下手をすると一度も目に止める機会を持たない子供も案外多いかもしれません。「自然観察」は、何も遠く離れた野山や海にまで出掛けて行って、豊かな自然に囲まれたところでなければできないというものではありません。また、特別に恵まれた自然環境ばかりに目を向けることも、片手落ちのような気がしません。まずは、普段から自分の生活の舞台となっている、地元のまちの最も身近な環境を知ることが、何にも増して重要なのではないのでしょうか。そんな意味からも、是非それぞれの学校の通学路を、一度観察のフィールドにしてみることをお勧めします。名前などわからなくても、実に多くの種類の野草がそこにたくましく生きている姿に、きっと心を打たれるに違いありません。学校に通う子供たちと、ささやかな感動を分かち合ってみてはいかがでしょうか。

なお、今回歩いてみて一つ気になったことがありました。かつては、どこにでも生えているという印象を持っていたオオバコ (オオバコ科) が、一株も見当らなかったのです。ひょっとすると我がまちではオオバコは絶滅種か絶滅危惧種になってしまったのでしょうか。今後、改めて調査してみたいと思っています。(ささやかな楽しみとして)

論 説

ペット飼育と自然理解

—教材としてのカイコの存在—

常務理事 平田 寛 重

最近、カイコを人工飼料で飼育している学校が目につくようになった。今回は、そのことから、飼育動物のかかわりと自然の理解について考えてみたい。

カイコと言えばクワの葉がその食草である。しかし、都市化した環境ではクワの葉を採取することは非常に難しくなってきた。また、カイコを飼っている農家でも労働力を補うために人工飼料が使われているところもあるらしい。人工飼料とはいってもクワの葉を原料にした固形物で直径5cm長さ30cmくらいのソーセージのような形(商品名:シルクメイトほか)をしていて、それを幼虫の成長に合わせて適当な大きさの切り身にして与えていくものである。

カイコはこの人工飼料を使えば、クワの葉でなくても育て繭を作っていくが、この一連のカイコを飼育する活動の中で子ども達は何を得るのであろうか。

カイコにかかわる活動というものは、小学校教育では、生活科での自然とのかかわり、理科での昆虫の成長等の学習といったことであろうが、人工飼料で育てるカイコというのは果たして、学習として適当なのであろうか？

カイコが野生のクワの葉を食べることも知らず、大きく育った幼虫がバリバリと音を立てて葉を食べる様子も知らず、また、近所を駆け回ってクワの葉を集めてくる努力もせず、ただ、プロイラーのように育つカイコで何が学習できるのであろうか？ どこに自然を理解したり自然とのかかわりをする糸口があるのだろうか？

3年の理科の学習では、主にモンシロチョウやアゲハを例にして昆虫の成長の学習を行う。自然の中で、畑のキャベツや庭のサンショウに産みつけられた卵は、天敵の鳥や寄生バチの難を逃れながら終齢幼虫まで成長し、蛹になり、羽化していく。成長の過程で幼虫の数が減っていくことも感覚として身についていくであろう。このような成長の様子を観察

することで、自然のつながりが学習できるのである。

キャベツ畑のアオムシをキャベツごといただいてきて、飼育箱で飼っていくといろいろなドラマがある。無事、羽化してはばたくものや寄生バチに食い荒らされるものがたりする。アオムシを飼育し、成長の様子を観察することで、理科としての科学的な教育を進めていくことはもちろんのこと、情緒面に働きかけることも可能となる。蛹が羽化する瞬間などは、誰もが感動する場面ではないだろうか？

情緒的な取り組みについては、意図して行うよりも自然とのかかわりの中で得られる体験を通して認識させるようにしたほうがよいであろう。そうでないと、自然とのかかわりや理解を差し置いて、その対象生物とのかかわりだけに終始してしまい、ペットとのかかわりと何ら変わりが無くなってしまふのである。「かわいい」だけの生活科や理科では、自然を学ぶのには適当とは言えない。

学校教育では、大勢で観察活動を行うために、観察場所のスペースや指導者の数の問題などで、効率よく学習することが難しい。それで、モンシロチョウやアゲハなどを、一時、野外から採取してきて飼育ケースに入れ、間近に観察活動を行うといったことを行うわけである。その場合、学習目的が達成できれば、採取してきた動物は採取してきた場所に戻しておけばよい。

それに対して、カイコは、完全に人間の管理下であって野生種として自然界に存在する動物ではない。絹を生産するために品種改良してできた家畜のようなものである。そして、蛹の段階で処分しておかないと生態系を乱すことにもなる。(注)

カイコは、家畜のような存在であればこそ、大量の卵を一斉に手に入れることができ、人工飼料だけでも飼育できる、飼育観察のしやすい素材である。また、繭から糸を紡いだり、繭玉を使って工作をしたりといった活動の広がりも考えられ、それなりに意味もあると考えられる。

しかし、人工飼料でカイコを飼い続けるという活動は、自然とは何の関わりもなく、ペットの飼育と何ら変わりはないわけで、自然と触れ合い理解するという点から考えると好ましい活動とは言えない。せめて、自然界のクワの葉を餌にして飼育活動していくべきであろう。カイコは、人工飼料で育てた後、クワで飼育することも可能である。現時点では、カイコは人工飼料よりクワの方を好むようで、クワで育てたカイコに人工飼料を与えてもあまり食べないくらいなのである。

また、素材がカイコであれ野外から持ち込んだモ

ンシロチョウやアゲハなどのものであれ、飼育し続けているうちに情が移ってしまい、ペットと同じような感覚に陥ってしまって、本来の教育の目的から逸脱してしまうことがある。このあたりのことについては、教育としてはきちんとしておく必要がある。

(注) 今日、国内ではほとんど採卵をする状況が無くなったため、カイコの採卵に関する法令は1998年の3月末日を持って終了した。従来のようなカイコ飼育の注意はなくなったが、良識の範囲内で飼育が行われることを期待したい。

平成10年度 収支決算報告

事務局 箕輪 多津男

(単位：円)

【収入の部】

〔項目〕	〔決算額〕
会費	618,000
売上	493,740
寄付金	2,000
参加費	10,000
連盟補助金	0
受取利息	171
前期繰越収支差額	376,134
収入合計	1,500,045

前期繰越収支差額	376,134
当期収支差額	189,043
次期繰越収支差額	565,177

上記の通り報告いたします。

平成11年3月31日

会長 江袋 島 吉
 会計 染谷 優 児
 事務局 箕輪 多津男

【支出の部】

〔項目〕	〔決算額〕
会誌発行費	614,250
通信運搬費	149,200
会議費	18,432
交際費	5,000
交通費	0
事務消耗品費	6,906
資料購入費	0
講師謝礼	0
連盟支払金	141,080
次期繰越収支差額	565,177
支出合計	1,500,045

監査の結果上記の通り相違ないことを認めます。

監事 徳竹 力 男
 監事 村口 末 弘

平成10年度 事業報告

事務局 箕輪 多津男

1. 「愛鳥教育」の発行

- (1) 55号(平成10年10月)、56号(平成11年3月)、57号(平成11年6月)を発行
- (2) 内容
 - ①愛鳥活動の「実践報告」等を掲載。
 - ②教材開発として「シギ・チドリ類観察用ワークシート」や「やちようぬりえ」を掲載。
 - ③論説では「手で触れる自然接触について」「給餌活動と愛鳥教育」等を掲載。
 - ④平成10年度夏期野鳥観察会、講演会、冬期研修会等の報告を掲載。
 - ⑤書評等を掲載。
 - ⑥その他の事項。

2. 観察会・講演会・研修会等

- (1) 夏期野鳥観察会
期日：平成10年8月21日(金)
場所：谷津干潟自然観察センター
内容：①「谷津干潟の鳥たち」
講師：谷津干潟自然観察センター
松井 淳氏
②谷津干潟での野鳥観察
- (2) 講演会
期日：平成10年11月13日(金)
場所：東京都生涯学習センター・セミナー室
内容：「主観と客観のバードウォッチング」
講師：全国愛鳥教育研究会顧問 松田道生氏
- (3) 冬期イベント
テーマ：「地球と遊ぼう'98 in 都立水元公園」
期日：平成10年12月13日(日)
場所：都立水元公園(東京都葛飾区)
内容：野鳥観察とともに「ぬりえ」を実施
- (4) 冬期研修会
期日：平成11年1月31日(日)
場所：多摩川関戸橋付近
内容：小学校の教師の方を対象に、カモ類を中心とした自然観察指導法等について学ぶ

3. 常務理事会

平成10年4月21日(火)、5月19日(火)、
6月16日(火)、7月24日(金)、8月21日(金)、
9月14日(月)、10月13日(火)、11月25日(水)、
12月18日(金)、平成11年1月22日(金)、
2月26日(金)、3月25日(木)

4. その他の行事・審査会への参加

- <審査会等>
- (1) 第50回愛鳥週間全国野鳥保護のつどい(島根県)
平成10年5月10日(日) 江袋会長、渥美副会長
 - (2) 愛鳥週間ポスターコンクール及び全国野生生物保護実績発表大会審査会(環境庁)
平成10年10月16日(金) 江袋会長
 - (3) 全国野生生物保護実績発表大会(環境庁講堂)
平成10年11月30日(月) 江袋会長
 - (4) 愛鳥週間野生生物保護功労者選考会(環境庁)
平成11年3月19日(金) 江袋会長
- <後援行事>
- (1) 助せたがやトラスト協会
「トラストバードウォッチング」
平成10年12月12日(土) 兵庫島河川公園
 - (2) 憲政記念館巣箱架け
平成11年3月10日(水) 憲政記念館北庭園
- <行事参加>
- (1) 神奈川県環境教育研究発表会
平成11年1月28日(木)
伊勢原市七沢自然保護センター 島田常務理事

書評

吉『鳥見びと 徒然草』平

皿井 信 著 平成11年3月20日発行
(社)豊橋文化協会 定価(本体) 1,500円

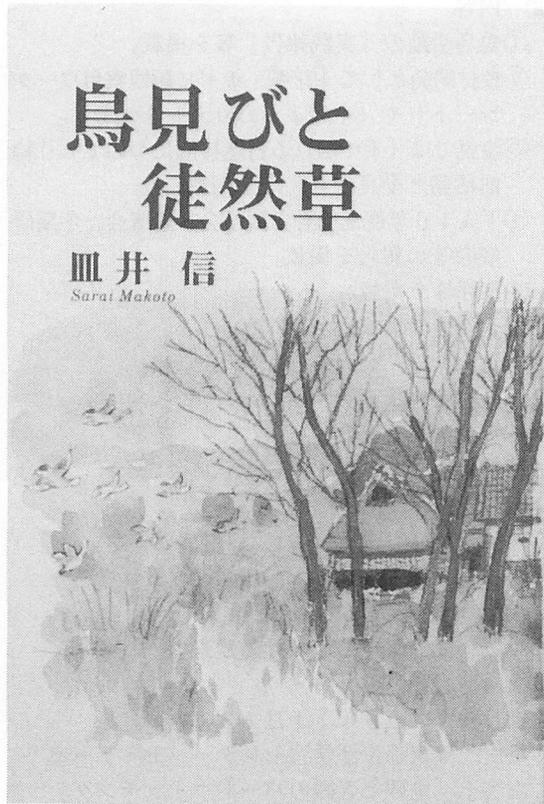
事務局 箕輪 多津男

本書のタイトルは、その名の通り、吉田兼行の随筆『徒然草』に対する著者の深い思慕の情から付けられたものである。それだけに、綴られている内容は、鳥や動植物を中心とした自然の営みにとどまらず、日々の生活に根ざした年中行事や風物にいたるまで、大変幅広いものになっている。著者は、平成9年10月に伊良湖岬で開催した研修会の際にも講師をつとめていただいた、全国愛鳥教育研究会の皿井信理事である。

構成としては、「Ⅰ新年」「Ⅱ春」「Ⅲ夏」「Ⅳ秋」「Ⅴ冬」の五章からなっており、それぞれの季節ごとの話題を横糸に、一方、著者の幼少の頃から現在にいたる生い立ちと、様々な体験をちりばめた時間軸を縦糸として、全編を通じて実にみごとな歳時記がそこに織り成されている。

また、本編のいたる所に唱歌が引用され、著者の言うところの「観賞」の心と相俟って、読者を郷愁の世界に導くかと思うと、現代の自然環境の破壊されていく状況に対して敢然と異を唱え、警鐘を鳴らすくだりが強く胸を打つ。そうかと思うと、最近の流行語をも視野に入れ、ユーモアたっぷりの語り口がそこここで色を添える。300ページを超える充実した内容ながら、大変読みやすく感じるのは、著者の力量のなせる技と言えらる。

「鳥見びと」として、自然を愛し続けてやまないその心に、読者として共感しつつも、今後の自然環境の行く末について否応なしに考えさせられてしまう書である。原文としては、豊橋文化協会の機関誌『豊橋文化』と、東三河野鳥同好会の機関誌『このはずく』に掲載されたものが基本となっているとのことであるが、本書が、地元の関係者のみならず、広く日本全国の方々に読まれるようになることを、切に願うものである。



<申し込み先>

・豊川堂(本店)

TEL. 0532-54-6688

・(社)豊橋文化協会

TEL. 0532-61-6145

(豊橋市向山大池町20-1 豊橋市民文化会館内)

事務局移転のお知らせ

この度、(財)日本鳥類保護連盟の事務局が下記の通り移転することになりました。それに伴いまして、本会の事務局も移転するところとなりましたのでお知らせいたします。

なお、新事務所での業務開始日は、平成11年7月12日(月)です。

記

[新住所]

〒166-0012

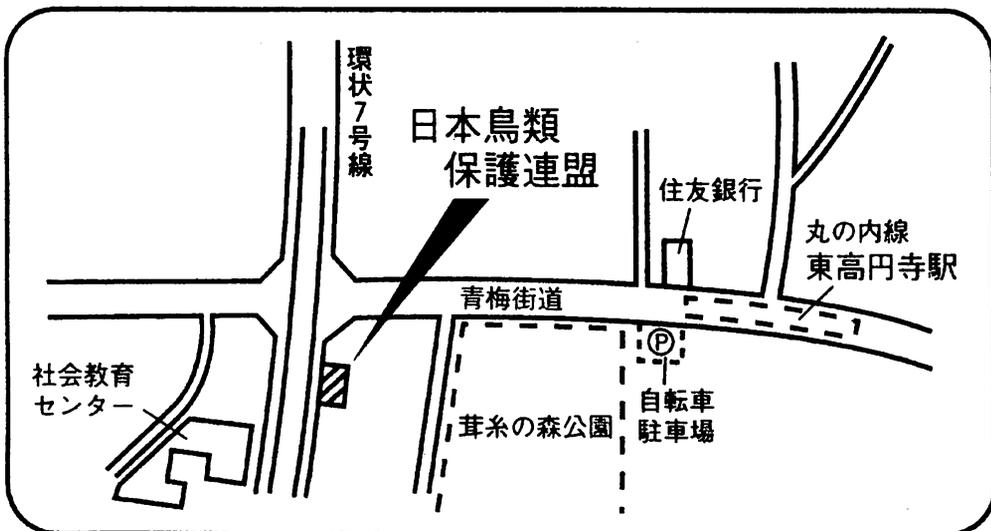
東京都杉並区和田3-54-5

第10田中ビル3F

(財)日本鳥類保護連盟内

TEL. 03-5378-5691

FAX. 03-5378-5693



編集後記

57号をお届けします。

付録として「第33回全国野生生物保護実績発表大会記録」を同封しました。参考資料としてご活用ください。

(染谷)

愛鳥教育 No.57

平成11(1999)年6月30日

発行人 江袋島吉

発行所 全国愛鳥教育研究会

住所 〒160-0022 東京都新宿区新宿2-5-5

新宿土地建物第11ビル5F

(財)日本鳥類保護連盟内

電話 03-3225-3590

FAX 03-3225-3593

会費 3,000円

郵便振替 00180-7-12442

印刷所 祐文社

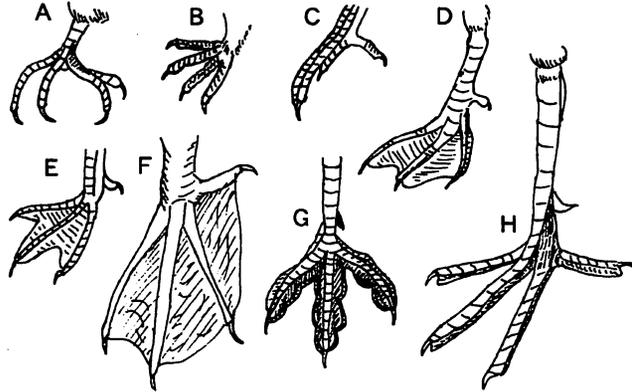
愛鳥クイズ (21)

常務理事 平田 寛 重

【前回56号の問題と解答】

今回は、野鳥の脚の形を調べてみましょう。脚のイラストと鳥の名前を合わせてください。

- ①カワウ ②マガモ ③オオバン ④キジ ⑤カワセミ ⑥コゲラ ⑦アマツバメ ⑧アジサシ
①→F ②→D ③→G ④→H ⑤→C ⑥→A ⑦→B ⑧→E



鳥は、基本的には、前に3本、後ろに1本の指がついています。生活形態により、指の間にひれや水かきがついたり、指がくっついたり、前の外側の指が後ろに向いて2本ずつ向き合ったりと、ここにあげるような形態の脚のかたちが出てきました。

- ①「ウ」や「カツオドリ」の仲間は、後ろの指の間まで水かきがついています。
- ②マガモなどカモの仲間は、水の中を脚をけて泳ぐために水かきがついています。
- ③オオバンやカイツブリの仲間は、指のまわりがひれ状になっていて、泳ぐ時に便利です。
- ④キジは地上で歩き回って暮らしているため、頑丈な指でできています。脚の少し上の部分に蹴

爪があるのが特徴です。

- ⑤カワセミの仲間は、前の指が根元でくっついてしまっています。
- ⑥コゲラなどきつつきやカッコウの仲間は2本の指が向かい合っています。きつつきの場合は、幹に垂直に止まるため、しっかりと幹につかまるためと思えます。
- ⑦アマツバメの脚は繁殖の時期をのぞき、ほとんど空中で飛びながら過ごすために、4つの指が前に向かって並んでいます。歩くためにはあまり向いていません。
- ⑧アジサシは、カモの仲間ほど大きくはありませんが、指の間に水かきがあります。

【今回57号の問題】

今回は、鳥の鳴き声と名前について考えてみましょう。

鳥の名前には、鳴き声からついたものがいくつかあります。名前の付けられ方にはいくつかのパターンがあります。一つ目は、直接的に鳴き声そのものが名前になった「カッコウ」タイプのものです。二つ目は、鳴き声か他の動物の声に似ていることからつけられた「ウミネコ」タイプのものです。三つ目は、鳴き声から連想されるイメージで付けられた「サンショウクイ」タイプです。ちなみに、サンショウクイの名前は、「ピーーリピーーリ」の鳴き声が出椒を食べてヒリヒリする感覚からきています。

では、カッコウタイプ、ウミネコタイプ、サンショウクイタイプの鳥の名前を一つずつさがしてみましよう。

《参考文献》 国末俊英 1995 名前といわれ日本の野鳥図鑑1・2 偕成社

